

コツとカンの動感深層^注

金子 明友

筑波大学名誉教授

[はじめに]

ただ今ご紹介いただきました金子でございます。今日の講演テーマは「コツとカンの動感深層」についてお話することになります。ここでいう動感という表現はことば通りに〈動く感じ〉とそのまま理解していただいて結構だと思います。ただし、発生論を主題化するスポーツ運動学で〈動く〉という意味は物理的な位置移動を伴わなくても、これからどのように動くのかを予描する志向体験、例えば、確率論的予測ではない〈先読み〉という身体能力なども含まれることになります。さらに動感における〈感じ〉とは、単に視覚や触覚などの感覚器の働きだけではなく、価値意識を伴うコツやカンという身体能力も意味されます。お手元にある皆さんのレジユメのパラグラフごとに説明するような形で話を進めていきたいと思えます。

今回は、コツとカンという動感身体に潜む能力の発生論を主題化しますが、それはスポーツ運動学の中核となる問題圏に属しています。コツとカンという身体能力は通時的、共時的な歴史身体の発生論にも関わりをもちます。フッサールがその超越論的論理学で発生論を *Genealogie* と呼ぶのはこの意味においてです。ゲネアロギーという表現は一般に系譜学の意味で使われることもありますが、ここではフッサールの発現現象学における意味の発生論が前景に立てられます。意味発生論というときの意味というのは、西欧語では

sense, Sinn, sens であり、いずれも意味と感覚の両義をもちます。私の話のなかに出てくる身体発生論ないし動感発生論というときには、超越論的論理学における〈意味／感覚〉の発生論ということになります。ですから、ここでいわれる感覚は単なる古典的な感覚与件の意味ではありません。それは価値意識を伴う感覚能力ないし動感身体能力との関わりで取り上げられています。従って、この発生論は生物学的な発生論でないことは贅言を要しません。たとえば発生遺伝学とか、発生生物学という、そういう内容の生物科学としての発生論でないのは喋々するまでもないでしょう。

昨年の神戸の学会のときに「人間の運動の人間のなるものは何か」という基本的な問題、つまりパトスの本質問題を取り上げました。そこには〈どうしても動きたいけど動けない〉〈動かなければいけないのに動けない〉という、パトス的な動感様相が存在しています。自ら動く人も、動きかたを教える人も同じパトス世界に共生する難しさを述べようとしたのです。そのような感動と苦悩との入り混じった身体運動の世界は当然ながら動感発生に関わりをもってきます。よく現場では、先生は上位に、生徒は下位に位置づけられ、上位の先生から下位の生徒たちへ、知っている人から知らない人に動きかたを伝えていきます。この場合には、一方的な伝達という形式をとることになります。しかし、日本語の〈伝承〉という表現はそのまま西欧語に端的に訳せません。西欧語では

注：この講演は、平成24年3月26日（月）～27日（火）に開催された第25回日本スポーツ運動学会大会（於福岡 二日市温泉 大観荘）の初日に第一部【基調講演】として行われたものです。

一方的に伝達するという語源 tradere をもつ表現が使われています。我々の伝承という表現には、伝え手と受け手の双方向的な働きが同時に含意されているのです。つまり伝える人と承ける人との相互主観的な働きがその表現に含まれています。この意味の〈伝承〉は西欧語では記述形式をとるしかその意味内容を一語で表せません。この伝承という表現には、伝える人が責任を持って、伝えられる人の気持ちをよく受け入れる関係系のなかで、ある身体能力が〈伝わる〉という意味が託されています。承ける人は上から強制されるのではなく、それを承け取ることに責任をもつのでなければなりません。

はじめに発生論という表現を説明してきたのは、単に動感図式が発生するという現象はそう単純な出来事ではないからです。私たちの発生論は決して動きかたの生成だけが主題化されるのではありません。その突然の動感消滅も分析対象になるのであり、その中にこそ先生と生徒、コーチと選手の相互関係の中に苦悩に満ちたパトス世界が浮き彫りになってくるからです。私たちのスポーツ運動学がマイネルのモルフォロジーを継承して、その動感発生の源泉に遡りながら実践的な発生運動学の道を切り拓こうとしているのはこの意味においてなのです。そこには地域を越え、世代を超えていく運動文化伝承という大義が存在していることを確認しておく必要があります。

【序章】 コツ＝カンの驚異性と侮蔑性

① 《驚くべき身体能力》

レジュメには、序章として「コツ＝カンの驚異性と侮蔑性」といささか固い表現になっていますが、ここではその驚くべき身体能力に注目していきます。日本人でコツやカンという言葉聞いてその意味が理解できない人はいないでしょう。レジュメにある通り、それは奇妙な身体能力の意味で日常的によく使われ、要すればコツは〈骨〉、カンは〈勘〉と漢字で表記されています。コツやカンの働きはスポーツの一流選手が示す驚異的な身体能力、これについてはもう例を挙げてご説明する必要もないでしょう。因みに、ここでいう身

体能力とは生理学的な体力ではありません。それは現象学的な動感身体の〈能力可能性〉が意味されています。とりわけ予持、把持を伴う原現在を捉える時間化能力がその身体能力の意味核をなしているのです。その例として「ピアニストや物づくり職人の驚くべき手業」が挙げられているのはその意味においてです。特にジャズピアニストなどは鍵盤の上で手が踊っているようです。どうしてあんなに指を動かせるのかと驚かされます。さらに、演奏に気持ちが乗って、サキソフォンやトランペットと合奏して、しかもそれが即興で行われることになる、その演奏者たちの身体能力を科学的な因果決定論で説明するのは困難です。トランペットのメロディーを聴いてから、どのようにピアノで弾こうかというのでは、即興という不思議な合奏が成立するわけがありません。そこでは、原因と結果は同時に起こり、それどころか〈結果が先取りされる〉という奇妙な身体能力が働かなければ、即興演奏は成立しません。このような身体能力はコツとカンの〈差異の同一〉という〈二重一元性〉の含意態に支えられているのです。

同じように、パソコンで入力する時も、キーボードを見ないままで私の指が勝手に動いてくれます。しかしそこでは、奇妙な指の動きかたに一つの〈まとまり〉をもつ動感図式の存在に気づかされるものです。さらには、レジュメにあるように、歩く、跳ぶなどの日常の動きかたのなかにも、単なる因果決定論では説明できない奇妙な動感能力の例証をすぐに見つけることができます。しかも日常の歩くという動きかたは、状況によってそのつど違う歩きかたをしているのです。一回ごとに違う動きかたなのに、同じ歩きかたをしていると感じています。それは形態学^{モルフォロジー}という構造分析の基本的な運動認識に他なりません。この運動認識に基づく、一定パターンの機械的反復を前提とした画像分析は否定せざるをえなくなります。動感身体的能力可能性を主題化するスポーツ運動学は〈差異における同一〉という奇妙な反論理性的運動認識から出発しているのです。ヴァイツゼッカー^{ゲシュタルトクライス}の構造円環理論は〈意味のある矛盾〉を〈反論理性〉として受け入れることから始まります。

〈同じだけれども違うし、違うけれども同じだ〉という奇妙な反論理をもった身体能力の世界は、私たちの競技スポーツや身体^{ビルドアップ}陶冶の世界では日常的な出来事ではないでしょうか。

②《コツの表記は正鵠を射る》

わが国では、コツと言う表現は古く、すでに14世紀の鎌倉時代から使われているようです。『徒然草』では、一芸を身に付ける能力として〈骨〉と表記されているのは周知の通りです。レジュメに「いわば骨^{ほね}という会意文字が体^{からだ}の核心を意味し」と述べてあります。この〈体〉という字にルビをふったのはその体が〈身体〉という意味を表したいからです。日本の古語としての〈から〉は亡^{なきがら}骸の意味で〈だ〉は接尾語ですから、〈体〉は遺体の意味になってしまいます。わざわざ〈体〉にルビを振って〈生ける身体〉の意味をもたせようとしたわけですから。さらに続いて「それによって、時の流れの中に捉えにくい動きの意味核が表わされている」とあります。この場合の〈意味核〉は動感図式の中核となる要点が意味されています。しかし、このコツという奇妙な身体能力は、西欧語ではうまく表現できないまま、〈騙す〉とか〈ごまかす〉という意味が付きまっています。ランプ手品の巧みな手さばきの能力の陰にはいつも〈ごまかし〉への疑念が付きまとい、そこに侮蔑感が潜んでいます。ところが、わが国のコツという表現は、西欧語では表現されない〈生ける身体の意味核〉つまり〈骨^{ポイント}〉を端的に表し、〈自我に中心化される身体能力〉という意味内容を簡潔に表現できます。それは勝れた表記として高く評価されることとなります。

さらにレジュメは、この表記によって「時の流れの中に捉えにくい動きの意味核」が表されると述べています。しかしここでは、コツという不思議な身体能力がフッサールのいう内的時間意識流と関わりと予告するだけにして、詳しい解説は後段に回します。私たちの日常生活は、時計の時間の中で過ごしていますから、その動感時間化の理解は困難を極めることとなります。その時計時間を括弧に入れて、その判断を中止すること自体がたいへん難しいのです。内的な時間意識の流れを

自らの身体で捉えること、いわば〈コツの流れ〉や〈コツの足音〉を聞くという身体経験はそう簡単に理解できるものではないようです。私たちの日常生活でも、道具は自動化され、コツに頼る機会がどんどん少なくなってきているからです。それだけに〈コツを掴む〉という奇妙な出来事に現象学的な反省分析を施すというのはまさに想像を絶する困難なことになってしまいます。ところが、体育学習や競技スポーツの世界ではコツ能力が日常的に求められているのです。それどころか、自ら動くのにコツが働かなければ、思うように動くことさえできません。それなのに、コツに頼らずにもっと科学的に合理的な動きかたを目指そうとします。競技に打ち込んでいる選手たちにとって、コツを掴むのは余りにも当たり前前の出来事なので、それに反省分析を加える必要もないと考え、忘却の過去へと流していることも気づかないほどなのです。

③《カンには侮蔑性が潜む》

コツと表裏一体になっているカンという身体能力は〈勘〉と表記されます。それは音符の〈甘〉と〈匹〉という字が使われ、甘は解字として〈挟む〉という意味があり、匹は〈並べる〉という意味をもちます。ですから、レジュメにあるように「両側から挟んで〈比べ考える能力〉」が意味されるのです。いわば、カンの表記そのものには単なる「動物的なカンが働く」とか「でたらめな山勘に頼る」といった貶められた意味はありません。とは言っても、カンと言う表現には侮蔑的な意味が見え隠れしているのも事実です。試験に「どこが出題されるか」にカンを働かせるのは当てずっぽうの〈山勘〉に賭ける事情があるのでしょうか。しかし「第六感が働く」とか「鋭いカンが働く」など状況判断のすぐれた身体能力も意味されず。カンという能力が漠然とした皮相的な経験や単なる知的情報だけに頼り、あるいは周囲の物理的な状況だけに捕らわれると、信頼できない〈山勘〉の侮蔑につながるようです。

しかし動感発生論としてのカンの概念は「動く主観身体がその周界の状況に向かって自ら投射していく予描的な身体能力」と規定できます。とり

わけ、カンによる状況判断は自らの動感身体から投射される能力に左右されます。競技スポーツの世界では、複雑に変化していく状況をどのように捉えるかは、それまで鍛え上げてきた状況判断の身体能力に頼るしかないのです。そのときカン能力に基づいてどのように動くのか、どのような振る舞いをするのかは、同時にコツ能力に裏打ちされていなければ、そのカン能力は生かされません。こうして、コツとカンの身体能力の二重一元性の動感構造が浮かび上がってくるのです。

④ 《コツとカンの二重一元性》

ここで、コツ能力とカン能力の相互関係を先取りして見ておきましょう。コツという身体能力は自己身体を中心にに向かって働きます。自己身体を中心とはいうまでもなく動感する身体の〈絶対ゼロ点〉です。それは〈絶対の今〉、〈絶対のここ〉としてわが身にありありと捉えられる動感身体に潜む一つの〈極限〉なのであり、理念的な関係点に他なりません。ですから、その絶対ゼロ点は実在していないので、当然ながら目に見えるものではありません。テキストに、コツは「私の身体に居合わせる〈中心化作用〉」と述べられてありますが、この中心化作用はこの絶対ゼロ点に向けてわが身で捉える志向体験の働きが意味されています。

レジュメにあるように、カンとは、私の身体とそれを取り巻く動感状況との〈関わり〉の中で〈勘案〉して動きかたを選び、同時にその状況化作用を実現できる身体能力だと理解されます。それは動感身体の絶対ゼロ点から周囲の状況に向けて投射されるカン能力の概念を示しています。そこにある絡み合った複雑な状況の中から幾つかの選択肢を比較考量し、同時に、その決定した状況判断を即座に実現できる身体能力が意味されているのです。ですから、それは単なる知的な選択判断だけではなく、動感感覚による価値判断とそれを実現できる身体能力が保証されていなければならないのです。

この序章において先取的に指摘しておきたいのは、ここに主題化されているコツ能力とカン能力は私の身体のみならず同時に作動しているという

ことです。ゼロ点に中心化するコツとゼロ点から投射していくカンはその状況に即して反転化しながら働いている身体能力なのです。コツが表で働いているときには、その裏でカンも同時に作動しています。同じように、カンを投射しているときには、その裏でコツが生き生きと働いていないと、実存の身体運動は成立しなくなります。後段で詳しく立ち入りますが、コツとカンは違った働きをもっていますが、それは私の身体の同一の働きに同時に関わっているのです。このような〈差異にして同一〉という非論理的な身体現象が実存の身体運動に起きていることに注目しておく必要があります。このコツやカンという日本語の表現は西欧語では的確にその意味内容を表現できないだけに、この身体能力の表現は世界に誇れる表記だと言えるでしょう。むしろ、私たち日本人のほうがコツやカンという表現に非科学的な好ましくない印象をもっているのかも知れません。としたら、それは単なる感覚主義か科学主義に一方的に取り込まれているからだと言わざるをえないようです。

【I】 身体運動の反論理性

① 《動きそのものは決して計測できない》

まず最初に確認しておきたいのは、ヴァイツゼッカーのいう反論理性と形式論理学という非論理性とは区別されるということです。最初の一文にあるように〈XはAだ〉と〈XはAでない〉という矛盾のない二つの命題を等式で結んで、〈XはAであり、かつAでない〉つまり〈Aは非Aと同じ〉という命題を立てると、これは論理矛盾になってしまいます。ところがフランスの哲学者ベルクソンは、すでに19世紀末に「すべての動きは絶対に分割できない」という奇妙な命題を立てているのです。私たちは運動を分割できると考えています。陸上競技100メートル走などは走った時間を分割して勝敗を決めているからです。しかし100メートル走は走った時間を分割しているのではなく空間を分割しているといったら驚いてしまうのです。ゴールの判定が微妙になると最後には、空間をスライスして勝者を決定するしかない

からです。時間と空間の奇妙な問題はゼノンの運動パラドックスで論じられているように、古代ギリシアから現代に至るまで哲学者たちを悩ませてきました。近代オリンピックが始まったのは1896年（アテネ大会）ですが、その頃にはすでにベルクソンは新しい運動認識論を取り上げているのです。それからもう100年以上も経ち、勝敗決定の時間は1秒の100分の1まで刻んで記録します。それどころか、現代科学は100万分の1秒まで測定可能な時代に入っているのです。「どんな動きも決して分割できない」という考えは哲学者の屁理屈にすぎないといふ考えてしまいたくなるほどです。

レジュメにも述べてあるように、運動の流れを停めて分割しないと移動した距離も経過した時間も分かりません。しかし、区別した瞬間と瞬間の間、つまり不動像と不動像の間しか動いてはいないのです。こうして1000分の1秒までに切り刻めば、それだけ〈動きつつある時間〉は小さくなっていきます。こうして私たちは〈動きそのもの〉とは一体どこに存在するのかと改めて考えざるをえなくなります。この頃、NHKで「ミラクルボディー」という科学シリーズ番組が放映されています。そこに登場するビデオカメラは100万分の1秒まで刻める超高速の精密さをもちます。1秒の100万分の1まで運動時間を小刻みにして、そこに〈動きつつある運動〉の秘密を暴こうとします。如何に奇妙な運動分析の時代が到来したのかに驚かされます。ベルクソンが厳密に定義しているように、〈動きそのもの〉〈動きつつあるもの〉は本質必然的に測定不可能なのです。その運動時間をどんなに微分しても、それは〈流れつつある動きそのもの〉ではなく、静止した瞬間と瞬間との空間を捉えているに過ぎないといふのです。

②《科学的運動学と現象学的運動学の違い》

科学の対象となる運動はデカルトの〈絶対運動〉という概念を基柢に据えて〈運動は分割できる〉という認識から出発します。近代科学としての絶対運動は静止している絶対空間と一様に流れる絶対時間を座標軸にしたニュートンの〈絶対運動〉が意味されます。だから17世紀に天文学の間

題も含めて運動の考え方が大きく転換され、科学革命と呼ばれるのは周知の通りです。そこでは、運動分割の可能性を求めて近代精密科学が発展していくことになります。しかし、そのこと自体をベルクソンが否定しているわけではありません。〈ニュートンの絶対運動〉とは全く異なる〈ベルクソンの絶対運動〉を主題化しているのです。ベルクソンは私の身体の運動のなかで直観によって捉えられる〈生命ある絶対運動〉の真理を追求しているのです。ですから、ニュートンの〈絶対運動〉とベルクソンの〈絶対運動〉の間には、その運動認識に本質的な差異が存在しているのです。

ベルクソンの〈絶対運動〉という考え方は、フツサールの現象学的運動認識と軌を一にして新しい運動学思想として発展して現代に至っています。マイネルのスポーツ運動学はその学領域に属し、端的にモルフォロジー運動学と呼ばれるのはその意味においてです。この生命ある形態学を主題化する運動学は、運動感覚の図式発生モルフォロジーの問題をとらえた現象学的運動学に基礎づけられています。それは差異と同一という二つの命題を等式で結んだ反論理性を基柢に据えています。スポーツ運動学はベルクソンやフツサールと軌を一にした生命ある身体の運動認識論から出発しているのです。これは科学的思考では非論理性として排除されているのです。しかし、生命ある身体運動を研究する新しい運動学は、メルロ＝ポンティと同様に〈運動とは静止像を含まない〉という運動認識を主題化するところから出発するのです。この運動認識の理解なしには、スポーツ運動の現象学的本質分析は一步も先へ進むことはできません。

このような現象学的運動認識に基づく新しい運動学というのは、運動概念を位置の移動や変化をだけに制限しません。じっとしていても運動が生き生きと躍動しているのを直観で捉えることを認めるのが現象学的な新しい動感論としての運動学に他なりません。私たちのスポーツ運動学はこの学問領域に属している厳密な純粹運動学なのです。たとえばあるコーチがじっと立って選手たちを見ている場合でも、確かに物理的には動いていませんが、そのコーチは選手たちの動きに生き生きとした動感志向分析を施しているのです。その

コーチは次の指示のために動感素材を見つ^{ヒューレ}け出そうと〈動きそのもの〉を観察しているのです。ここに剣道をなさる方もおられると思いますが、剣道ではお互いが構えていて動かないときでも、いつ隙を見抜くかに動感感覚は生き生きと働いているはずで^レす。その動感志向の一瞬の様相変動を捉えるのもスポーツ運動学の志向分析として主題化されるのです。その時に、機を窺ってじっとしている剣道の人は位置移動しないから、運動分析の対象にならないと排除されたら、剣道に打ち込んできた方々は どう思うのでしょうか。そのような隙を見抜く能力は単なる意識の問題だから、科学的運動学の分析に値しないと排除されるのは一体どこに問題があるのでしょうか。いわば、運動分析として数量化するの^レは科学的運動学の役割ではありますが、それ以外は運動学的研究に値しないと排除されたら、現場の選手や指導者に内在する動感経験の分析は放置されたままになってしまいます。ベルクソンやフッサールの動感意識を分析する厳密な運動学が100年以上前に成立していることに改めて注目する必要があります。ここにお集まりの方々はスポーツ運動学の研究者ですから、このことをくどくど説明する必要は全くないかも知れません。

③ 《身体運動に潜む意味ある論理矛盾》

お手元のレジュメにあるように、ヴァイツゼッカーは人間の身体運動が生成消滅、出来事、出会いに関わる時に〈有意義な矛盾〉が顕在化してくると注目すべき発言をしています。この生成消滅は私たちのスポーツ運動学では動感図式の生成と消滅の現象であり、本質分析の対象になります。身体の動きかたは、本来的に有意義な矛盾を秘めています^レが、それは単なる非論理的な矛盾ではないし、ナンセンス（無意味）な動きではありません。スポーツ実践の現場には、コツやカンの意味のある矛盾の例証に事欠きません。身体運動におけるコツ＝カンという身体能力は決してナンセンス（無意味＝無感覚）な非論理ではないのです。というのは、コツとカンは異なる働きをする身体能力ですが、自ら身体の中で同じ動感作用をもっているからです。この作用^{アクト}という用語は志向

体験、つまりそういう動感意識をもつ身体経験が意味されています。コツ＝カンという動感能力の働く身体現象はフッサールのいう二重感覚概念を基^レに据えた出来事ですから、コツが働かなければカンは画に描いた餅のように何の役にも立ちません。野球のランナーが盗塁をしようとした場合、「今だ」と思っても即座に走れるコツが働かなければどうにもならないのです。レジュメにもあるように、カンの働きのないコツ能力がどんなに俊足をもっている、状況を読み違えてはナンセンスであり、そのコツは役に立たない無意味なコツだと嘖われるだけです。

最後に「〈コツ＝カン〉として等式で結ぶのは、この動感現象が固有領域のなかで二重一元性をもつ反転可能な反論理という本質可能性を意味した^レいから」というレジュメの一文を少し解説しておきます。コツというのは私の身体で動ける能力であり、カンは自らを取りまく世界の状況に向かって投射していく身体能力のことです。だからコツとカンは私の身体の中で別々な働きをします。コツが表で働くときにカンは同時に裏で働き、カンが表で働くときには、同時にコツはそれを支えますから、この身体能力は同一の自我身体に同時に働いて、しかも異なる働きをするのです。しかも、差異にして同一という反論理性をもちながらそのコツとカンはそのつど反転化して働きます。だからコツとカンは〈コツ＝カン〉と等式で結べる同一作用であり、カンを先に働かせて〈カン＝コツ〉に反転化して息づいているのです。こうして、コツとカンの奇妙な動感能力は二重一元性という反転化する反論理性を本質必然性とすることになるのです。ややこしい論理展開ですが、スポーツをやっている人なら誰でも自らの動きかたを反省分析すれば、直ちに納得できるはずで^レす。その具体的な例証が浮かばない人は、習慣となった科学的思考のために身体運動を外部視点から見るという自然科学的立場からまだ脱出できていないのかも知れません。

【Ⅱ】動感能力に潜む生成消滅の深層

①《生成消滅は同時に交替する》

レジメの第Ⅱ章タイトルは「コツ＝カンの生成消滅の深層」になっています。すでに述べたように〈コツ＝カン〉〈カン＝コツ〉という身体能力は同時に反転化して同時に働く動感身体の〈能力可能性^{フェアメーグリヒカイト}〉ですから、それは端的に動感能力と約言できます。ここでは、その動感能力における生成消滅の現象は同時に交替することが主題化されるのです。この出来事は因果決定論が習慣化している私たちには理解しにくいかもしれませんが。フッサールの二重感覚の例証に従えば、右手で左手を触ると、左手は触られていると感じ、右手は左手を触っていると感じます。しかし、触っている右手が左手に触られていると感じることもできます。そこでは〈触る〉〈触られる〉という意識が絶えず変わります。先に述べたコツ能力とカン能力もこれと同じ関係をもっています。コツが近づいてくる足音に聞き耳を立てると、情況を読むカンは同時に裏に消えますが、生き生きと働いているのです。この奇妙な動感意識交換の同時性がこの第Ⅱ章で主題的に取り上げられることとなります。

レジメには「このような動感作用の生成と消滅の交替現象では、その意識交換を同時にできる」とあります。この動感能力の生成消滅という出来事をヴァイツゼッカーは^{プリウス、ホステリス}先も後もない「交換作用の同時性」として認めざるをえないと言うのです。それはこのような意識問題における生成消滅の同時性を学問として記述する方法がこれまで存在しなかったからだと付け加えています。競技で敗れると、その原因を体力不足やメンタル面の対応不足を挙げ、その補強トレーニングに再起を賭けるという因果決定論が支配的な競技スポーツ界です。そこでは、生成消滅の同時性という考え方はなかなか理解しにくいようです。因果決定論でプログラムできるロボット運動と同じと考える科学的運動認識に慣れていますが、生ける身体運動の発生消滅が奇妙な同時性を示しているのに気づかないのかも知れません。ところが現役の選手たちにとって、敵が動く前にその気配を感じ

とって先に動くという、因果論否定の動きかたは当たり前前の出来事なのです。競技スポーツで因果法則に則って動くことが命取りになることは選手たちの身体が覚えているのです。このことを^{プリウス、ホステリス}先も後もない「交換作用の同時性」という^{ゲシュタルトクライス}構造円環を理論化したのが神経生理学者のヴァイツゼッカーだったのです。この運動学会の皆さんはすでにお読みになっていると思いますが、ヴァイツゼッカーの『ゲシュタルトクライス』(1940)という名著が邦訳されたのは1975年であり、それは新しい運動学にその理論的基礎づけを与える注目すべき著作の一つに他なりません。

②《生成消滅の匿名的な偶発性》

レジメに「動感形態の生成消滅における偶発様相」とあります。それは動感のメロディーには一つの〈まとまり〉があって、その〈かたち〉の生成も消滅もすべて偶然に現れる様相を示すというのです。つまり〈今まさにそうなっている〉という様相は誰にとっても秘密なのです。ヴァイツゼッカーはこの生成消滅の瞬間を **Nun-einmal-so-Sein** とハイフンで結んで「今はこうなのだ」という匿名の偶発性を浮き彫りにしています。このドイツ語の表現は、たとえば「世の中はこんなものだ…」というときのように、いわば諦めの語感を潜ませているのです。だから、ある動きかたが突然できたり、その動く感じが突然消えてしまうのは、とっさに偶然に現れるからどうにも説明しようがないというのです。ヴァイツゼッカーは「偶然と秩序が境を接し」、外部観察者ばかりかその動感発生に居合わせている本人でさえも「予期と不意打ちとが入り混じって」捉えようがないと諦め気味なのです。いわゆる動感図式化の偶発的な出来事に対して、人はただ狂喜するばかりであり、突然襲ってくる〈技の狂い〉に茫然自失となってしまうのです。子どもたちがよく小躍りして「アツできた!」と叫んでも、その瞬間の出来事は何も分かっていないのです。できたという事実それ自体は本人にも分かるのですが、どのようにできたのかの動感意識の流れは全く捉えられません。この動感時間意識の流れをどのような方法論によって本質分析するのが私たちの運動学の喫

緊の課題になります。

スポーツ運動学で主題化される動感発生論は、偶発的な動感生成の現象だけではありません。むしろその動感メロディーの突発的な消滅現象こそ分析対象に取り上げられなければなりません。ある動きができた人は小躍りして喜ぶのは当然としても、反対にそれまで当然のように動いていたのに、その動感メロディーが突然消えてしまう奇妙な現象に戸惑ってしまうのです。むしろ、この動感消滅の分析研究こそ運動学の意味核を示しているとも言えます。「どうして動感メロディーが突然に消えたのが全く分からない」と天を仰いで長大息する苦悩の日々が続くのです。どんなにやろうとしても、突然に反逆した私の身体は全く意のままになりません。それは物体化した〈痺れた足〉と同じです。足が痺れた時というのは自分の足なのに〈物体化した足〉に変わり、自ら自由に駆使できる〈身体化した足〉ではなくなってしまうのです。痺れた足のように自分の身体が全く動けなくなった世界、その偶発的な消滅現象というのは未熟な初心者だけでなく、世界の一流選手たちさえも襲うことはよく知られている事実です。

その例証の一つを挙げると、私が1958年に初めてナショナルコーチになったとき、その世界選手権の予選を勝ち抜いた6人の選手のうちの4人が鉄棒の規定演技にある宙返りが突然できなくなってしまったのです。この技は今では小学生でもできる技ですが、突然4人のチーム選手が〈技の狂い〉に見舞われたのです。規定の技ができないのでは常勝ソ連チームを破ることなど不可能なのです。当時の日本の選手たちはみんな世界のトップクラスの実力者ばかりです。その選手たちが簡単な宙返りがどうしても手が離れないという奇妙な出来事に見舞われたのです。体力がないわけでもなく、他の多くの技は見事なさばきを当然のように演技できるのに、その宙返りだけが狂うという奇妙な動感消滅現象に苦しめられたのです。同じように、跳び箱が怖くて跳べない子どもや泳げなくて水には入れない子どもたちの切迫したパトスをだれが受け止めてくれるのでしょうか。その消滅現象に共在できる先生こそ、本来の体育教師という専門職ではないのでしょうか。何れにしても、

動感消滅という奇妙な出来事に立ち向かう志向分析こそ運動学の特徴的な研究対象として脚光を浴びることになります。

③《動感出会いの発生地平》

こうして、ある動きかたが偶発的に発生したり、突発的に消えてしまったりする奇妙な動感発生 of 出来事は常に匿名のまま私たちには秘密になっています。そこには因果法則が通用しませんから、必然的に確率論も成立しません。ひたすら〈動きたい〉と努力をしてきたご褒美に神様がコツを授けてくれ、反対に、慢心した私からカンを一気に召し上げてしまうと考えるしかなくなります。いわば、神様が突然授けたり、召し上げたりする身体能力は私の〈固有財産〉ではなく、〈異他なる身体能力〉〈見知らぬ異郷の出来事〉と考えざるをえません。しかも、神様が授けてくれるような異郷世界と考えた途端に、外部視点からその身体能力を分析できるはずだと早合点します。そこに科学的運動分析に傾斜する分かれ道が浮かび上がってきます。私の身体能力は主観身体に内在しているはずなのに、それを外部視点から科学的に分析できると考えてしまうのです。その科学的メカニズムを知れば、それを私の身体に取り込んで総合化できると信じてしまうのです。しかし、その科学的データは無機質な他者でしかないから、それをわが身に取り入れようとしても、そこに動感出会いが成立しないことを思い知らされます。

ここにおいて、その見知らぬ異郷にある自らの動感意識流は外から対象化するのではなく、自らの身体の動感経験を本原的に反省分析する立場、つまりノエシス・ノエマ構造の立場から捉えるしかないことに気づかされます。レジユメにあるように、異郷世界にある動感図式が突然に私の身体の中に入り込み、あるいは突然に消滅してしまうのは、そこに匿名の動感感覚が〈出会い現象〉として受動世界に発生するからです。それは数学的な時空系における〈同時符号の遭遇ないし離反〉という物理現象とは本質必然的に区別されるのです。こうして、私の動感という身体経験に内在する出会い現象は奇妙な偶発的な生成と消滅を発生

させることとなります。

この主観身体に発生する奇妙な動感出会い現象はさらに他者との動感世界の交流に転移される本質可能性をもちます。つまり、私の動感世界の出会い現象は他者の動感世界との出会い現象に広がりをもつことになるのです。これが伝承世界を支える間動感意識の発生という出来事です。伝え手の動感感覚と他者の動感感覚がアナログンの動感志向性を共有し、そこに親しみが湧いて、相手の動感感覚を私の身体で本原的に感じとり、相互に分かり合えるという、いわば間動感世界が成立することになります。ですから、他者の動感感覚との〈出会い〉は動感伝承世界には不可欠となります。つまり、先生と生徒との動く感じが出会わないと本来的な動感発生の指導はうまくいきません。さらに加えて、水泳を上手に教える先生が器械運動の指導が苦手だとしても、水泳を教える動感能力を器械運動の動感能力に転移できる動感出会いの世界が成立する本質可能性も存在するのです。この本質可能性はスポーツ運動学の基柢に据えられてその異なる動感経験に通底する原動感の存在こそ間動感発生の運動学一般理論を基礎づけることとなります。いろいろなスポーツ種目があっても、その底層位には共通の地下水が流れていて、そこに通底する地下水には共通する原動感性の能力一般が存在するのです。こうして、本原的な動感身体の源泉に遡及することによって、はじめて原動感発生の地平構造を分析対象に取り上げることができることとなります。

④《絶対ゼロ点の本原的所与性》

ここにおいて、動感経験の出会い現象は現象学的人間学の基礎の上にその姿を見せてきます。その動感出会いの生成消滅という出来事は先に述べた動感創発の現象野においても分析されますが、とりわけ特徴的に取り上げられるのは教師と生徒、選手とコーチという動感伝承としての出会い現象です。動感促発能力による伝承発生は動感図式の伝承生成と伝承消滅の方法論として主題化されます。それらの動感能力の創発論とその促発伝承論に共通の基盤領野をなしているのが原動感発生という始原論的領野に他なりません。そこでは

動感発生の源泉をなすフッサールの意味の〈絶対ゼロ点〉における身体経験が原現象として浮かび上がってきます。

この〈絶対ゼロ点〉という表現は聞き慣れない言葉かも知れません。「絶対ゼロ点はどこにありますか」という質問をよく受けることがあります。「ヘソあたりかな」と考えた途端に、この絶対ゼロ点という極限志向性という考え方が消えてしまいます。というのは、現象学の絶対ゼロ点という理念的関係点と、数学の座標原点との区別が混線してしまうのです。絶対ゼロ点は実在する物理空間には存在しません。たとえば今、手を握って拳をここ（胸の前）において「これは上ですか、下ですか」といった場合、上から考えたらこれは下だし、下から考えたら上になります。では、どこを中心に上下という空間意識を捉えているのが問題になるのです。こうして、フッサールは遂行する自我に本質可能性として意識原点の存在を指摘します。それをフッサールは〈絶対ゼロ点〉と名付け〈絶対の今〉と〈絶対のここ〉という動感原点の絶対経験を定立することになります。ですから、この絶対的な身体経験を源泉とする動感出会い現象は、先に述べた〈同時符号の遭遇ないし離反〉という物理現象とは全く異質な出来事であることを確認しておく必要があります。こうしてはじめて、動感出会い現象は遠近感領野と気配感領野へと多様なカテゴリーを抱えながら広がりを見せていきます。

このような動感化原点^{ゾマトロギー}の身体学的な絶対経験が「単なる意識状態や心理的事実ではない」とするメルロ＝ポンティの指摘はきわめて重大です。それは動感という身体経験はその本人に本原的に与えられています。つまり、その身にありありと感じ取れるその動感志向性は本質的必然性をもっているとメルロ＝ポンティは強調するのです。とすると、このような本質必然性をもつ身体経験をどうしても分析対象に取り上げないわけにはいかないのです。その本原性をもつ生成消滅の生きた様相変動の分析、約言すれば、この動感様相化分析は現場の指導者たちが日常的に当たり前の方法論として実践しているのです。それはどうして理論化されないまま放置されているのでしょ

か。このスポーツ運動学会においてこそ、スポーツの世界で喜び、苦しみ、悩んでいる指導者たちが一堂に会して貴重な身体学ゾマトロギーの動感経験を交換できる場になるのではないのでしょうか。ここでいうスポーツ運動学というのはどんな身体運動にも共通の一般理論が意味されています。というのは、いろいろな競技の身体経験、舞踊ないし演劇の身体経験にも通底する本原的な自己所与性は一般理論を構成する本質必然性をもっているのです。ですから、それぞれの種目ごとに個別の運動学の分析成果を持ち寄って、共通の土俵で討論できる学会こそ一般理論としてのスポーツ運動学が輝きを放つのではないのでしょうか。

【Ⅲ】動感時間化の深層

① 《現在は立ち止まりつつ流れる》

ここでいう時間化という表現はフッサールの *Zeitigung* の意味になります。つまり、この時間化という内的時間認識は時計で測れる等質時間から截然と区別することを前提としてはじめて理解されます。コツヤカンという身体能力で捉える異質時間ヘテロゲーンは自我身体のゼロ点における〈絶対の今〉に中心化されることによってわが身に感じとれるのです。競技スポーツでは時計で時間を計って勝敗決定の資料にします。しかし、ここで問題になる動感化された時間というのは私の身体で感じとる主観的な時間です。だから、誰もが共通にもつ時計の時間と違って、主観身体で〈絶対の今〉を感じとる能力なのです。その〈今統握ホモゲーン〉のなかに、たった今過ぎ去ったのを現在につなぎ止める〈把持〉と呼ばれる意識が働きます。それと同時に、今まさに到来しつつあるのを待ち受ける〈予持〉とよばれる意識も働くのです。このような把持と予持が絶対の今という源泉点のもとに奇妙な時間幅の〈庭〉をもっているとフッサールは指摘します。この〈超越論的な今〉、つまり主観身体に内在している〈絶対の今〉として〈原現在〉を捉える身体能力こそが時間化能力と呼ばれるものです。言うまでもありませんが、ここで意味されている能力は本質可能性をもつ能力の意味であり、能力性ないし能力可能性とも訳される

Vermöglichkeit というフッサール独自の造語に他なりません。

陸上競技の短距離選手の朝原さんに新聞記者が「小さな子に100mの全力疾走を教える際はどうかを注意して教えるのですか」と聞いた記事がありました。とりわけ時間競技を代表する100m走で100分の1秒を争う世界でのぎを削る名選手がどう答えるか私は非常に興味をもちました。彼は「今走った感じと、次に走る感じとどこが違うのかをしっかりと覚えてね」と必ず言うそうです。時計でタイムを測り、メジャーを使って何メートル跳んだと測ることは誰にでもできます。朝原選手の問いかけはまさに今把握と時間化能力という現象にどうして気づかせるかという核心を衝いた動感交信の借問なのです。とすると、この動きつつある自我身体の動感意識を捉える基柢には、源泉点としての〈今把握〉とそれに過去と未来の動感意識を引き寄せる〈時間化能力〉の働きが本質必然的に浮上してくることになります。つまり、今を捉えていて過去と未来を〈絶対の今〉という〈原現在〉に引き寄せる能力こそが動感発生を左右するのです。フッサールはその時間化能力を「立ち止りつつ生き生きと流れる原現在」と奇妙な表現に託します。現象学者の中にも「このような矛盾した言葉をフッサールは平気で使う」と批判めいたことをいう人もいるほどです。立ち止まるとは動かないことで、動かないのに流れるとは、まさに論理矛盾なのです。しかし、私たちの身体学ゾマトロギーとしての運動学はこれを意味のある矛盾として認める立場をとります。それをむしろ反論理性として正当化し、超越論的今、絶対の今として捉えようとしているのです。このようなフッサールの奇妙な時間論は競技に打ち込んできた指導者や選手たちには、わが身でありありと感じとり、動感身体で自ずと納得できるのではないのでしょうか。それは余りにも当たり前の動感感覚の時間化として理解できるのですから、これまた奇妙な出来事というしかありません。

② 《時間化能力の越境性》

この超越論的な原現在という動感時間意識は、競技スポーツの経験者でなくても、日常の散歩に

おける歩きかたを反省分析すれば、立ちどころにわが身に感じとれる身体経験に他なりません。今歩いている私が歩きながら〈ここ〉はどうなっているか、〈今〉はどのように変化しているかを反省すると、絶対に変わらない〈今把握〉と〈ここ把握〉を直ちにわが身に感じ取れるはずです。つまり〈今とここ〉は絶対ゼロ点として遂行する自我にいつも同伴し、居合わせているからに他なりません。とすれば、選手たちにどのようにして時間化能力を高めるかという指導方法論も問題として浮上してくることになります。まさに、朝原選手の子どもたちへの問いかけは正鵠を射た反省分析の一端を示していることが分かります。

フツサールの意味する「立ち止りつつ生き生きと流れる原現在」という奇妙な表現を単なる哲学者の戯言だというのでは、実存する身体経験の深層に潜む不思議な動感発生現象を見逃してしまうことになります。こうして、私たちは身体能力に潜む時間化現象に注目する必要に迫られます。つまりそこには、動感能力による潜勢から現勢への越境という出来事が必然的に現れるからです。時間化能力によって捉えた潜勢的な身体運動は現実の〈動きかた〉ないし〈行動のとりかた〉の中に現に実現されていきます。そこには、自由に駆使できる現勢的な身体運動へと越境する必然可能性が存在しているのです。さらに、その逆に現勢的な身体運動はそのなかで同時に未来の潜勢的な〈動きかた〉ないし〈行動のとりかた〉を予描するために越境する必然可能性をもつこととなります。その動感時間化能力の越境性には、コツやカンという身体能力を空虚から充実への方法論が拓かれる本質可能性も見逃してはならないようです。

【IV】動感情況化の深層

①《動感出合いを保証する一つの我々》

第四章のテーマは動感情況化の深層についてです。この動感情況化という表現は動感能力で捉えた情況をどのように構成化するか意味されています。動感情況というのは動感意識が投射化される地平構造をもっています。ですから、その地平

構造をもつ情況は単なる地理学的な風景や状況ではありません。いわば、ノエマとなる動感情況はベクトル構造の合力が働く物理学的現象ではないのです。ボイテンディクの巧みな表現を借りれば、構造化された意味内容に関わりをもつ振舞いこそ〈情況〉と呼ぶに相応しいのです。人間存在の本質必然性に属する動感情況こそスポーツ運動学の分析対象に取り上げられるのは当然のことと言えます。

たとえば、サッカーの情況判断は味方プレーヤーとの動感連帯感の成立こそ決定的な意味を持ちます。私と動感意識を共有できる味方との関係は単なる物理的な位置関係をもつ他者ではないのです。そこには、フツサールのいう〈我汝連関〉Ich-Du-Konnex という動感出合い現象が発生していることとなります。私と君の動感出合いから成立する我汝連関とは〈私の動感語りかけ〉と〈その動感を受け入れる君〉との間に成立する〈一つの我々〉ein Wir という出来事の発生が意味されているのです。ボールゲームに見られる連係プレーは動感化された我汝連関、つまり動感仲間化による〈一つの我々〉の発生に他なりません。そのための動感促発のトレーニング方法論の確立は喫緊の課題になります。

ここにおいて、動感情況を捉えようとして観察するときには、眼で見るのではなく、^{からだ}身体で、つまり動感身体で見ることができなければならないのです。他者の身体運動を見るときにはその他者と同じ動感能力を共有できるのが前提になります。しかし、動感投射がうまく行かないときには関係する選手たちにその動感仲間化の程度を確かめるために借問をしなければなりません。この借問という表現は何回もしつこく問いかけて聞いてみることです。この借問能力は先生やコーチに必修の動感能力の一つと言えます。それは単なる〈ことばかけ〉とは本質的に違います。たとえば小学校の子どもにある動きを教えているとき、先生が「今どんな感じだったの」と聞くと、子どもは「分かんない」と言うだけです。「分からないのか」と言って納得してしまう先生は借問する動感能力が欠損したままなのです。「分からない」と言われたときに「じゃあ、こういう感じはない

のか」とか「あの時はどんな感じだったの」と子どもの動感意識に立ち入って次々と質問できるのは、仲間化された動感連帯感をもっている先生の借問能力によるのです。となると、体育教師やコーチはまさに動感借問能力をどのようにして身に付けるかが問題になります。動感仲間化によって〈一つの我々〉を形づくるという営みが情況分析には欠かせないとすれば、その実践方法論が早急に拓かれなければなりません。

② 《動感情況は^{からだ}身体で感じとる》

しかし、動感連帯感をもって動感情況を分析するときに、その情況の何を読み取るのでしょうか。ラグビーの選手がボールをもって走っている場合、その選手を何とかタックルしようと敵方の選手が追いつぎます。しかし、そういった情況の背景を全部消してしまったら、ある物体が移動していて、その後からある距離をもった物体が同時に移動しているだけです。その二個の物体の距離が伸びたり縮んだりする運動経過は精密に分析できます。それによって、追跡の客観的な事実を捉える事ができると考えます。そこでは、メルロ＝ポンティのいう科学的思考だけが働き出して、実存の動感情況の肝心な本質分析は放棄されていることに気づかなければなりません。

こうして、私たちの動感情況の分析は全く別な方法をとります。その逃げている選手が迫ってくる敵の動きを背中で見る事ができる身体能力を観察対象に取り上げるのです。それが動感情況の志向分析であり、^{ソマトロギー}身体学としての動感観察分析なのです。つまり追いつがる敵方の情況を背中で捉える能力を見抜かなければ、動感情況の観察分析は成立しないからです。逃走する選手と追跡する選手のそれぞれの動感志向分析が主題化されなければ、科学的運動分析と区別できません。二人の選手が何をしようと走っているのかを「推測することはできても、動感情況を^{からだ}身体で見ることにはできない」というポイテンディク^{ポテンティク}の指摘は決定的な意味をもってきます。そうでなければ、スポーツ運動学の厳密な観察分析は成立しません。しかし、動感情況の観察能力が決定的な意味をもっていることは納得できても、その情況判断能力のト

レーニング方法論を体系化する課題が待ち構えています。訓練可能な観察能力のトレーニング方法論では、その動感情況そのものをどのように捉えるのかがさらに問題になってくるのです。ただ単に偶然の経験を重ねて、その確率の高い動感情況は良否判断の基準になるのでしょうか。

③ 《確率論の成立しない動感情況》

ここにおいて、私たちは動感情況の判断基準をめぐって、さらに数学的な確率論への道にしつこく誘い込まれることとなります。ところが、新しい動感情況はそのときどきによって偶発的に、突然に生み出されるのですから、この時はまさに「今はこうなのだ」Nun-einmal-so-Sein という情況発生瞬間は常に秘密なのです。その今現在の情況の地平世界はどうなっているのか見当も付かないのです。だから、ヴァイツゼッカーは「そこに因果法則の入り込む余地が全くない」から「その出来事の発生論に統計処理といった科学的な方法は成立しない」と断言するのです。このようなヴァイツゼッカー^{ゲシュケルトクライス}の構造円環という新しい運動発生論は機械論的な因果連関に慣れている我々の耳には何か謎めいて聞こえます。しかし競技に生きる人々たちにとってその難解な発生論はしごく当たり前の出来事として^{からだ}身体で了解できるのではないのでしょうか。

ところが、実存運動の動感情況のなかにあっても、その運動を客観的な時空系に現れた〈事後的事象変化〉と理解する因果論に私たちは余りにも慣れ切っています。すでに完了した出来事を統計的に処理すれば、客観的な因果連関を掴めるはずだという呪縛からなかなか抜け出せません。ロボットにする情況変化のデータはあらゆる可能性を準備できるから、その成否は確率問題に還元できると考えてしまうのです。カンに頼って価値判断をしていて、その思いがけない出来事の偶然さに苦しめられる経験が続くと、この確率論的思考が急に頭をもたげ、気まぐれなカン能力では頼りにならないと焦りを感じてきます。こんな時には、とりわけ確率論が私たちを誘い込むことしきりなのです。どうしても勝たなければならない試合で全責任を負わされる監督は非科学的な第六

感に頼るのが何より不安になるからです。せめて、高い確率を保証してくれるデータがあればと統計的標準データに縋りたくするのは頷けるものです。こうして、その高い確率のデータに即座に対応できるように選手たちの行動を反復訓練してロボット化すればよいと考えていくことになります。八方塞がりの監督はどうせ〈駄目もと〉だから、藁にも縋りたい切迫感に襲われ、確率のデータにすがりつきます。こうして、漠然としたカン＝コツに頼るのは非科学的であり、より客観的な情報を得るのは因果決定の確率論によると信じて疑わなくなっていくます。

しかし、99%の成功確率をもっていても、たった1%の失敗がどんなに意味をもって迫ってくるかを想定しないで済むのならコーチは気楽なものです。その万一の失敗が生命の危険を引き起こすときには、確率99%の成功をもっていても、選手の不安は消えません。そこでは、遂行する自我身体が信じ切れる動きかたしかできないのです。そのとき、コーチに動感連帯感をもつ〈一つの我々〉が成立しないと、気楽に確率論に依存するようになります。練習で確率100%の成功もいざ本番になると、想定外のことが起こるのは現場の実践指導者はよく知っています。それを科学的なメンタルトレーニングに託してもやはり想定外の事態を否定できません。このような全責任を負わされるコーチの苦悩はその当人は知り抜いているはずなのです。多くの競技コーチは動感促発の貴重な経験知をもちながら、何故かその経験分析の秘訣は非科学的と貶められるという呪縛から逃れられないようです。私たちは改めて現場に隠れている貴重な経験知に厳密な現象学的反省分析を施すことに道を拓かなければなりません。

④ 《シンボル形態を生む動感能力》

ここにおいて、私たちは動感情況のなかでも、もっとも漠然とした気配感が働くシンボル形態の現象に注目することになります。メルロ＝ポンティの名著『行動の構造』では、生きものの行動形式を3つの次元に区分しているのはよく知られています。つまり癒着形態と変換形態、シンボル形態の3つの次元です。癒着形態というのは現実

にそこに何があるかという、対象物に密着した次元です。たとえば、そこに餌が見えればそれを捕ろうとします。その次元が癒着形態です。その次の変換形態は、さっきの餌の例でいうと、餌を手で捕ろうとするけれどもそこまで届かない場合は何か棒みたいなものを持って引き寄せて捕ろうとする次元です。最後のシンボル形態というのは、それらとは全く別種の次元であり、人間特有な世界があるとメルロポンティは指摘します。この3つの行動形式の次元は生きものの種に対応しているわけではありません。つまり、人間特有な競技スポーツにおいてさえ、そのトレーニングでは動物の強調と同じように感覚刺激とその反応動作という機械的な反復訓練が珍しくないからです。

しかし、人間に固有なシンボル形態では、絡み合った有意味な情況のなかで類似の動感素材ヒューレに気づき、そこに通底する動感図式を見出す〈シンボル化能力〉が浮上してきます。このシンボル化能力は運動主体の決断と承認によって成立する一元的な動感経験という含意態に支えられています。ボールゲームなどでは「なんとなく流れがこっちに来たな」と思うことがあります。漠然とした価値判断ではあるけれども、確かにそういうことを全体として、動感感覚でそう受け止めているのです。そう思った瞬間に直感的に別の手を打つようなことがあります。それは全身で感じ取る奇妙なシンボル化能力とでも言うしかない出来事なのです。いわば、絶対ゼロ点から発する気配感というシンボル化能力が予描の働きを生化させる可能性をもちます。私たちのスポーツ運動学の領域では多くの動感発生論の問題が未解決のまま放置されていることに注目する必要があるのではないのでしょうか。

【終章】動感地平性の深層分析

① 《反論理的な動感反転性》

これまで主題化されてきたコツとカンという動感能力は奇妙な反論理をもつ反転性を含意態にしています。その身体能力は本原的の充実に向けて努力志向性が目的論的に無限に働いていきます。ここに終章として動感能力の本質特性は以下の3点

にまとめられます。

【差異と同一の反論理性】

自我身体に中心化される〈コツ＝カン〉と情況に投射される〈カン＝コツ〉はそれぞれ異なる固有の動感作用をもちます。〈コツ＝カン〉はコツが表で働き、カンは裏で働いているという意味です。だから〈カン＝コツ〉は球技のポジショニングにおけるように、カンが先行してコツは同時に裏でそれを支えて働いています。このコツとカンは別々な役割をもっていますが、同時に同一の働きかたに表裏一体となって機能するのです。その出来事をソシュールという言語学者は一枚の紙を鋏で切ったら表も裏も一緒に切れてしまうとその一体性を説明します。別言すれば、コツとカンという動感能力は相互に異なる機能を果たしながら、私の身体の内なかで同一の働きかたに働くという反論理性を基根に据えているのです。

【相互隠蔽の交換同時性】

動感能力のコツとカンは相互隠蔽性という奇妙な本質可能性をもちます。コツが現れるとカンは意識の背景に沈み、カンが先に現れるとコツは意識から隠れます。しかし、このコツとカンの交替は全く同時に一気に行われる必然可能性をもちています。だから、コツが先行して後からカンが働くのではなく、同時にコツとカンは交換されるのです。相互に隠蔽するこの交換同時性は因果決定論を拒否するのはこの意味においてです。しかもコツとカンの反転化による同時交換が行われますが、その交換は端的に動感意識の切り換えだけによって行われます。そこにはリヴァーシブルな上衣を裏返すときのような動作は存在しません。反転化という表現は動感意識の反転化作用が意味されていて、実在の動作を伴わないのです。それは二重感覚現象における〈触る手〉〈触られる手〉の意識反転化と同じ現象であり、その両手は位置移動なしに意識だけで反転化できるからです。

【相互隠蔽の同時機能性】

さらに、交換が同時に行われて、一方が裏に回りますが、その機能は同時に裏で生き生きと働い

ているのです。つまり、そこでは交換が同時というだけでなく、同時に機能しているのです。隠れたコツ能力が働かないと、カンのすばらしい予描はまさに〈絵に描いた餅〉になってしまいます。つまり、カンが先行するとき同時にコツは裏に隠れますが、その働きそのものは消えずに生き生きと機能しているという奇妙な現象です。同じように、コツが先行してカンが働かなければ、そのコツ能力は〈間の抜けた空回り〉になって、役に立たないコツとして顰蹙を買うことになります。

②《自在同時即興の越境性》

このような反転可能な二重感覚現象は、とりわけ触覚と動感感覚の反転可能性は〈撫でる〉や〈擦る〉という動きを伴う時により鮮明になります。だから、コツ＝カンの反転化における二重感覚現象は動感能力との関わりの中なかでこそ浮き彫りになるのです。この動感反転化現象では、自我の働かない受動的な動感意識と能動的な動感意識の間に越境現象が、つまり〈隠れ〉から〈現れ〉への自在な越境可能性が絡み合ってきます。こうして動感中心化の〈コツ＝カン〉も動感情況化の〈カン＝コツ〉も共に地平に沈みつつも、荘子のいう〈適自然〉の層位が現れる本質可能性も見逃すわけにはいきません。そこでは、そのつどの最もよい働きかたが〈ひとりで〉立ち現れてくるからです。いわば、コツもカンも同時に虚ろな受動世界に漂いつつ生化する層位は、洗練化領野の非人称自在化として特徴的に現れてきます。その遂行自我は虚ろな動感意識の中なかで漂いつつ動ける〈非人称自在即興〉の層位を否定することはできないのです。しかし、この自在同時即興という受動的な動感層位は技の極致を究めた名人達人にしか拓かれないというわけではありません。我々の日常でも、使い慣れたパソコンや携帯電話の手の動きはまさにこの非人称的な自在即興性をもつ可能性を示しているのです。

このような動感能力における受容性と自発性にまつわる実践的例証はスポーツの競技場面では枚挙にいとまがないほどあります。とりわけ、身体接触を伴う格闘競技やサッカーなどの球技に多く見られるのは周知の通りです。さらに短距離走の

ゴール前の〈流し〉の走形態や後転跳び連続にみられる能動態から受容態への自在反転化作用も決して珍しい出来事ではありません。こうして、この反転化現象は〈二重一元性〉と〈宥和一元性〉との自在な越境性を潜める絡み合い構造へと展開しながら驚異的な動感能力が示されるのです。従って、動感地平構造の深層に沈んでいる〈予描される潜在性〉を厳密な現象学的志向分析によって明るみに出す地平分析がスポーツ運動学の本質的な役割の一つに挙げられるのはこの意味においてです。

【結語と展望】

① 《動感消滅への道》

最後にこの動感発生の深層をめぐる講演のまとめとして個人的な希望を述べさせていただきたいと思います。動感発生には生成と消滅という現象が必然的に現れますが、私たちはほとんど動感生成の現象に関心が集中しがちです。最後に特にお願いしたいのは、むしろ動感消滅という現象に改めて注目していただきたいということです。これまでは、技が狂ったり、動きが悪くなると、体力不足かメンタル障害かの二元論的処方へ傾斜しているのが一般です。しかし、やりたくてもできない子どもに目を向け、技の狂いに苦しんでいる選手たちのパトス世界に共存しながら、厳密な現象学の地平分析に入って、その潜在態を明るみに出して欲しいと思います。これまでの〈技能向上〉の運動学のみならず、〈技能消滅〉の運動学にスポットを当てていただきたいのです。それこそが動感発生分析論の本領といえるからです。できない子、苦悩する選手の動感感覚に対して、厳密な地平分析ができるのはスポーツ運動学研究者の本来的な独自の役割となります。動感消滅という奇妙な現象に立ち向かうところにスポーツ運動学の独自の発展が約束されるのではないのでしょうか。

② 《身体性の教育への道》

体育という概念に関して、先ほど申し上げた〈殻から・だ〉、いわば物質身体の発育発達だけを促進するのが本義だと狭く考えないで欲しいと思いま

す。むしろ、身体の〈身〉のほうにこそ〈技が身につく〉や〈その身になって考える〉などのパトス的な動感身体に関する未開拓の現象野が広がっているからです。確かに〈体〉の方は物質からできているし、物質でない〈身体〉は存在しませんから、フッサーも「私は幽霊身体の理論は好まない」と指摘しているほどです。たしかに人間の物質身体は切れれば血が流れ、痛みを感じます。しかし、その私の足は痺れると物体化して、私に反逆するのです。その奇妙な〈身体的なるもの〉、つまり身体性という現象に特に注目する必要があるのではないのでしょうか。そういう意味で、身体性の教育こそ体育の本質だと唱道されて半世紀も経っていますが、その実践研究は放置されたままのようです。その〈身体的なるもの〉としての身体性こそが、子どもたちに身に着けさせる本質必然性を持ち、体育の核心をなすことを強調しておきたいのです。

③ 《競技運動学への道》

私たちのスポーツ運動学は一般運動学の理論体系であり、個別の競技運動学や舞踊運動学はそれぞれの領域研究があることをすでに本論で言及しています。とりわけ、ここでは、それぞれの競技論の運動学領域が共通の土俵をもっていない現状を指摘しておきたいのです。各球技や体操競技などの運動学会はあっても、他の類似の競技運動学との比較分析論に共通の土俵が設けられていないのではないのでしょうか。それぞれの国際スポーツ連盟に対して、強力な学問的な発言権をもつ学会はできないのでしょうか。競技スポーツが政治経済のグローバリズムに呑み込まれて巨大化し、純粋な競技本質が崩壊の危機にさらされている現状を直視する必要があります。競技スポーツそのものの本質が揺らいでいるのが現状ではないのでしょうか。国際競技連盟に対して、強力な進言をする研究者集団にスポーツ運動学が発展することを願って、私の講演を閉じたいと思います。

レジュメの内容から脱線したままの舌足らずの講演に対して、ご静聴いただいたこと心から感謝いたします。有り難うございました。